

東京学芸大学 留学生センター

2010年度 年報

1. 平成 22 (2010) 年度 概観

留学生センターのさまざまな業務のうち大きな割合を占めるのは、本学の外国人留学生に対する教育活動および留学生センターが実施母体となっているプログラムの運営である。それらについては、以下の 6 項目に分けて、[] 内の章・節において詳述する。

- 1 全学留学生を対象とする日本語教育 [2.1]
- 2 全学留学生を対象とする日本語理解教育 [2.2]
- 3 国費研究留学生および教員研修留学生（教研生）を対象とする日本語予備教育 [3.1]
- 4 教員研修プログラム（国費）の運営 [3.2]
- 5 日本語・日本文化研修プログラム（国費）の運営 [4]
- 6 短期留学プログラム（短プロ／ISEP）の運営 [5]

上記の対象である、平成 22 (2010) 年度の受入留学生数は 419 名であった（10 月 1 日現在）。留学生総数は前年と大きな変化はない。ただし、前年の平成 21 (2009) 年度に、東アジア教員養成コンソーシアム関連を含み海外協定校が一挙に 9 校（うち 2 校は学術交流のみ）増えたこともあって、平成 22 年度は複数の新たな協定校から留学生を受入れることとなった。上にあげた教育活動は恒常的な業務であるだけに、年度報告の中で特に学内外に訴求力のある報告とはなりにくい。留学生センターにとっては根幹をなす業務であり、受講者層の変化に対応しつつ、コース・プログラム内容の質的向上に向けて、年度ごとあるいは半期ごとに見直しや改善をはかっている。

上記を踏まえた上で、平成 22 年度の特記事項としては、1) 日本人学生と留学生との交流活動の促進、2) 附属小学校 3 校と留学生との交流活動、3) 日本語による言語行動に対する自己評価アンケート調査の分析と活用 の 3 点をあげて概略を述べる。

1) 日本人学生と留学生との交流活動の促進

上述したように、本学には 400 人を超える外国人留学生が在籍しているが、一般の学部生にとって身近な存在となっているとは言いがたい。学部留学生が 10 数名にとどまり、交換留学生と日常的に触れ合う場はまだまだ少ないためである。留学生とくに 1 年間の交換留学生にとっても、来日後早い時期に日本人学生と知り合う機会を得ることは、その後の留学生生活を豊かにすることにつながるだろう。平成 22 年度は、日本人学生と留学生との交流を促進する方策として、各部門において以下のような活動を行なった。

日本語教育部門では、平成 21 年度に続き、「プロジェクト学習科目：留学生とともに学ぶ世界のことばと文化」（学部正規科目：春学期 2 枠、秋学期 1 枠）を開設し、留学

東京学芸大学 留学生センター

2010 年度 年報

生センターが開講する日本語科目との合同授業を行うことによって、学部生と留学生との相互理解を深める場を提供した。日本人学生の定員は 25 名としたが、いずれも定員を超える参加希望があり、留学生との交流に対する潜在的な需要を実感した。一方、留学生にとっては主として日本語学習の場であるが、ほぼ毎回行なわれる日本語母語話者との討議やグループ作業を通して特に「話す」「聞く」能力の向上が見られた。

日本理解教育部門では、ISEP 科目（使用言語：英語）の「ISEP Seminar」において、日本人学生の参加希望者を募り、受講留学生との共同調査プロジェクト「『外国人学校』と日本のマイノリティ問題」を実施した。事前の準備・観察および調査・事後の報告まで数週間にわたって行い、その成果を報告書にまとめたⁱ（第 6.2 節参照）。課外では、「国際交流カフェ」「中国語でしゃべランチ」「韓国語でしゃべランチ」を各週 1 回開催し、日本人学生と外国人留学生が集い交流する場を提供し活動を行なった。「国際交流カフェ」では日本人学生、留学生合わせて平均約 40 名が参加し、活動の中心的存在が生まれつつある。夏期に実施した 1 泊 2 日の「国際交流合宿」でも、「国際交流カフェ」参加者の一部が学生スタッフとして力を発揮した。

海外協定校の増加にともなって、学部生の留学の道も選択肢も広がった。が、協定校への派遣留学生の約 8 割は教養系学生である。教育系学生の場合、3 年時、4 年時での教育実習が壁となり、留学に踏み切りにくい状況となっている。今後特に教員に求められる具体的な資質能力として「地球的視野に立って行動するための資質能力」があげられているように、教員養成の場では、さまざまな地域や文化に根ざした考え方や価値観の相違を知り、理解し、尊重する態度を養うことも重要な 1 項目であり、留学生センターとしても今後もさまざまな形で交流の場を提供していきたいと考える。

2) 附属小学校 3 校と留学生との交流活動

平成 22 年度は、これまでに交流の実績のある附属小金井小学校、附属竹早小学校に加え、附属大泉小学校とも留学生センターの日本語授業の一環として交流をおこなった。小金井小学校（4 年生）とは主として日本語日本文化研修留学生が、竹早小学校（3～6 年生）とは主として教員研修留学生が、大泉小学校（5, 6 年生）とは「日本語 3 特別演習（プロジェクト）」の受講者が、それぞれ自国紹介等のプレゼンテーションや「遊び」等を通して交流をおこなった。交流の概要については、報告書『2010 事業報告 附属小学校と留学生との交流授業』ⁱⁱに記したので、参照されたい。また、交流時におこなっ

ⁱ企画・実施にあたってトップマネジメント経費の配分を受けた。

ⁱⁱ企画・実施にあたってトップマネジメント経費の配分を受けた。

東京学芸大学 留学生センター

2010 年度 年報

たプレゼンテーションを生かし、一部を小学生対象のワークシートとして教材の使用版を作成したⁱⁱⁱ。本学は教員養成系大学として幼稚園から高校まで14の附属学校を擁しており、教員研修プログラムにおいても日本語日本文化研修プログラムにおいてもそれを一つの特色として打ち出している。現職の教員が主である教員研修留学生はもちろんのこと、学部レベルの留学生にとっても、小学校の教育システムや小学生の生活は興味深い対象である。交流授業は各附属小学校からの依頼を受けてスタートしたもののだが、教員養成系大学ならではの活動として今後も連携をしていきたいと考える。

3) 日本語による言語行動に対する自己評価アンケート調査の分析と活用^{iv}

留学生センターが開講する日本語科目は入門から上級まで5レベルに分かれているが、各レベルの設定を具体的な言語行動を記述することで示している。また、プレースメントテスト実施時に、学生自身が具体的な言語行動をどの程度実現できるか自己評価（Can-do statements 調査）を合わせて行なっている。平成22年度秋学期から、日本語5と4が全学対象日本語科目となったため、各日本語科目のレベル設定が変化した可能性がある。そこで、秋学期に実施したCan-do statements 調査の結果をもとに、各レベルの学生が日本語を使い、どのような行動を実現できるかあらためて記述を試みた。レベルによっては受講生の能力差が大きいことが問題となっており、今後、レベル設定の枠組みを再検討する必要がある（第2.1.5節参照）。

最後に、平成22年度末に襲った東日本大震災について一言触れておきたい。3月11日の東日本大震災とそれによる津波、福島第1原発の惨事は、被災地から距離のある本学の留学生にも、どう行動すべきかそれぞれに判断と選択を迫った。気象庁のホームページにアクセスし連日風向きをチェックし避難先を考えたという人、家族の安心を優先し留学の継続を断念した人、大使館の勧告に従い帰国したもののこんなときだからこそ日本にいたいと早々に再来日した人…。非常事態を前にして判断と選択を迫られたのは我々も同様で、さまざまな情報が行き交う中、留学生センターとして適切な対応をとることができたのか、この点については次年度の検証課題としたい。

なお、平成22（2010）年度半ばに、生活支援部門所属の唯一の専任教員が退職したため、下半期は生活支援部門の担当者不在の状況に陥った。生活オリエンテーションやチューター説明会、生活相談などの業務は他の専任教員が分担しておこなったが、とく

ⁱⁱⁱ 総合的道德教育プログラムの教材開発・体験学習プログラム開発WGとして経費の配分を受けた。

^{iv} 企画・実施にあたってトップマネジメント経費の配分を受けた。

東京学芸大学 留学生センター

2010 年度 年報

に震災時の対応など中心となるべき生活支援部門が十分に機能し得なかったことは否めない。

2. 全学留学生対象の事業

2.1 日本語科目

「日本語 1」(上級) から「日本語 5」(初級) までの 5 レベルにおいて合計 117 枠 (春学期 56、秋学期 61) を提供した。それらは以下のように構成されている。

表 1 日本語クラスの構成

	授業形態	必修・選択の別	クラスの決定方法
日本語 1	一般 (週 2 時間)	選択	全学日本語プレースメントテストならびに Can-do statements 調査による
日本語 2			
日本語 3			
日本語 4	集中 (週 20 時間以上 [日本語 4]) (週 30 時間 [日本語 5])	国費研究留学生・教員研修留学生で日本語能力の低い者は必修	学習歴調査による
日本語 5			

プレースメントテストならびに Can-do statements によるクラス分けは、これまでに蓄積されたデータの科学的な分析の結果に基づいて行っている。日本語 1～3 については、科目毎に相関の高い項目の結果を選んでクラスを決定しているため、作業量は数倍になるが、いい結果が得られている。

2010 年度のプレースメントテスト受験者は春学期 179 名、秋学期 149 名であった。

2.1.1 日本語 1～3

2010 年度は春学期 31 枠、秋学期 36 枠を開講した。「*」印のところには日本語教育教室で開設している正規の日本語科目があるため、東京学芸大学が提供している留学生のための日本語科目は春学期・秋学期ともにそれぞれ 3 を加えた数となる。

東京学芸大学 留学生センター

2010年度 年報

表2 日本語科目の種類・レベル・数（春学期）

	総合	作文	講読	会話	漢字	聴解	文法	発音	特別演習	プロジェクト
日本語1	1	1*	2	1*	1	1	*	-	1	2
日本語2	1	2	2	2	1	1	1	1	1	
日本語3	2	1	1	1	1	1	-	-	-	-

表3 日本語科目の種類・レベル・数（秋学期）

	総合	応用	作文	講読	会話	漢字	聴解	文法	発音	特別演習	プロジェクト
日本語1	1	-	1*	2	1*	1	1	1*	1	3	1
日本語2	1	-	2	2	2	1	1	2		2	
日本語3	1	1	1	1	2	1	1	-	1	-	1

一般の語学の授業と同様、それぞれの担当者が科目の種類・レベルに合った授業を行うが、教科書等については前の学期のものと重ならないようにするなど調整を行うこともある。（日本語科目（日本語1～3）一覧【資料1】）

2.1.2 日本語4～5

「日本語4」と「日本語5」は集中方式の授業で、「日本語5」は入門から初級終了レベル、「日本語4」は初級後半から中級初めのレベルである。本来は国費研究留学生や教員研修留学生で日本語能力が不十分な者のためのコースであったが、近年留学生の状況が変化し、特に交換留学生で初級レベルの授業を必要とする者が出てきたので、2010年度より必修科目と選択科目に分けて全学に開放した。（以前にも日本語能力の低い学生に対しては個別に許可を出して受講させたことがあったが、あくまでも例外的な措置であった。）全学に開放することによって、必ずしも英語能力がある学生ばかりが入ってくるとは限らなくなったため「日本語5」においては、メインのテキストを英中韓3言語による解説書のあるものに変え、小テストを含めたテスト類すべてを新しくした。

2010年度の「日本語4」と「日本語5」は以下のものであった。

日本語4

春学期

学生数 : 10（教員研修3、交換2、私費5）

東京学芸大学 留学生センター

2010年度 年報

科目と時間/週： 「総合」16、「応用」6、「漢字」4（合計26時間/週）

テキスト：

「総合」：『みんなの日本語 初級II 本冊』

「応用」：『みんなの日本語 初級II 本冊』

『みんなの日本語 初級II 初級で読めるトピック25』

「漢字」：『基本漢字500 Vol.2』

秋学期

学生数： 11（研究留学生1、短プロ7、交換1、私費2）

科目と時間/週： 「総合」10、「応用」6、「漢字」4（合計20時間/週）

テキスト：

「総合」：『みんなの日本語 初級I 本冊』（15課から）

『みんなの日本語 初級II 本冊』

『にほんご おしゃべりのたね』

「応用」：『みんなの日本語 初級II 本冊』

『みんなの日本語 初級II 初級で読めるトピック25』

「漢字」：『基本漢字500 Vol.2』

日本語5

春学期

学生数： 3（研究留学生2、私費研究生1）

科目と時間/週： 「文法」16、「文字」4、「会話」4、「読解・作文」2、「聴解」2、
「コンピュータリテラシー」2（合計30時間/週）

テキスト：

「文法」「会話」「読解・作文」：『初級日本語 げんき』

「文字」：『一人で学べる ひらがな かたかな』

『基本漢字500 Vol.1』

「コンピュータリテラシー」：テキスト使用せず

秋学期

学生数： 11（教員研修9、短プロ2）

科目と時間/週： 「文法」16、「文字」4、「会話」4、「作文」2、「聴解」2、「発音・
コンピュータリテラシー」2（合計30時間/週）

東京学芸大学 留学生センター

2010年度 年報

テキスト :

「文法」:『日本語初級 大地 1, 2』

「文字」:『一人で学べる ひらがな かたかな』

『基本漢字 500 Vol.1』

「会話」:『日本語初級 大地 1, 2』(ダイアログ部分)

『みんなの日本語 初級 I、II 本冊』(練習Cの部分)

「作文」:『絵入り日本語作文入門』

「聴解」:テキスト使用せず

「発音・コンピュータリテラシー」:テキスト使用せず

2.1.3 留学生による授業評価

学期終了前に、学生による授業評価の実施を各科目担当教員に依頼している。教員が質問用紙と回答用紙(マークシート)を配布し、学生が回答した用紙は学生自身が回収し、国際課に提出するという方法をとっている。授業に関する質問項目は下記のとおりである。

授業に関する質問項目

6~15の質問は、つぎの[5~1]で答えてください。

[5: そう思う 4: 少しそう思う 3: どちらとも言えない 2: あまり思わない
1: 思わない]

- | | |
|-------------------------|---------------|
| 6. 授業科目名や目標にあった授業内容だった。 | [5 4 3 2 1] |
| 7. 授業内容がよく理解できた。 | [5 4 3 2 1] |
| 8. 興味を持って受講できた。 | [5 4 3 2 1] |
| 9. 新しい知識・能力・技能が身についた。 | [5 4 3 2 1] |
| 10. 教員は熱心だった。 | [5 4 3 2 1] |
| 11. 教員の指示はわかりやすかった。 | [5 4 3 2 1] |
| 12. 教員の説明は適切だった。 | [5 4 3 2 1] |
| 13. 教員は質問にわかりやすく答えてくれた。 | [5 4 3 2 1] |
| 14. 教員の話し方は聞き取りやすかった。 | [5 4 3 2 1] |
| 15. 教材は適切だった。 | [5 4 3 2 1] |
| 16. (日本語のクラスについて聞きます。) | |

あなたにとってこのクラスは、

東京学芸大学 留学生センター

2010 年度 年報

[5:むずかしすぎた 4:むずかしかった 3:ちょうどよかった 2:やさしかった
1:やさしすぎた]

17. そのほかの意見やコメントがあったら、書いてください。

日本語のほか、英語、中国語、韓国語の4言語で記載している。質問項目は、評価対象授業が、留学生を対象とした授業であり、大半が語学の授業であるということを考慮して作成したため、学部が実施している「授業評価アンケート調査」の項目とは異なるものとなっている。

授業評価の結果は、科目ごとに集計し、平均値と標準偏差、自由記述の内容を担当教員に報告している。

2010年度春学期は、日本語1から3の26科目（17教員）において実施された。延べ回答者数は、317人であった。各項目についての全科目の平均値と標準偏差は表4のとおりである。どの項目も平均値は非常に高く、標準偏差も小さいことから、多くの科目において高い評価を得ていることがわかる。内容が理解しやすかったかを問う問7は、平均4.70であるが、学部の同様の質問（内容が理解しやすいよう配慮されていた）では、「そう思う」（5段階評価の5）が34.8%（2010年度春学期）にとどまっており、大きな差がある。語学の授業であるため、単純に学部の授業とは比較できないが、留学生センターが開講する授業に対する評価が高いことがわかる。

表4 2010年度春学期授業評価の結果（全科目）

	問6	問7	問8	問9	問10	問11	問12	問13	問14	問15	問16
平均値	4.78	4.70	4.45	4.56	4.81	4.73	4.73	4.75	4.76	4.58	3.07
標準偏差	0.50	0.63	0.83	0.75	0.52	0.63	0.64	0.64	0.63	0.71	0.64

2010年度春学期までは、日本語4と5は研修コースという位置づけから全学対象日本語科目とは別に授業評価を実施していた。しかし、秋学期から日本語1から3同様全学対象科目に変更したため、授業評価も全学対象科目として実施した。秋学期は、日本語1から5の39科目（20教員）において授業評価アンケートが実施された。延べ回答者数は384人であった。各項目についての全科目の平均値と標準偏差は表5のとおりである。春学期同様高い評価を得ているが、春学期と比較すると、若干平均値が低くな

東京学芸大学 留学生センター

2010 年度 年報

っている。標準偏差から判断すると、科目により評価に差が生じていると言える。

表 5 2010 年度秋学期授業評価の結果（全科目）

	問 6	問 7	問 8	問 9	問 10	問 11	問 12	問 13	問 14	問 15	問 16
平均値	4.60	4.59	4.32	4.50	4.75	4.58	4.58	4.58	4.59	4.36	3.04
標準偏差	0.77	0.73	0.94	0.77	0.56	0.75	0.74	0.77	0.79	0.98	0.75

2.1.4 日本語科目レベル別言語行動記述（Can-do statements 調査）

留学生センターでは、プレースメントテスト実施時に、学生自身が具体的な言語行動をどの程度実現できるか自己評価（Can-do statements 調査）を実施している。秋学期から、日本語 4 と 5 が全学対象日本語科目となったため、各日本語科目のレベル設定が変化した可能性がある。そこで、秋学期に実施した Can-do statements 調査の結果をもとに、各レベルの学生が日本語を使い、どのような言語行動を実現できるか記述を試みた。

分析対象となったのは、表 6 のとおり、日本語 1 から 4 の 133 名である。日本語 5 は、日本語の知識がまったくないため、調査を実施していない。

表 6 Can-do statements 調査有効回答者数

	日本語 1	日本語 2	日本語 3	日本語 4	合計
人数	55	46	24	8	133

Can-do statements の各項目について、レベルごとに平均値を計算したものが次の表 7 である。平均値 5.5 以上を濃い網掛け、3.5 以上を薄い網掛けで表した。「読む」「聞く」「話す」はレベル差がはっきり識別できる形になっている。しかし、「書く」については、日本語 3 と 4 の差が大きく、日本語 2 と 3 においてその差が小さいことがわかる。また、日本語 1 と 2 の差も小さく、日本語 1 でも自信を持って実現できる項目が少ない。今後「書く」の項目が現実場面に合わせた内容であるか検討するなど、見直しが必要である。

東京学芸大学 留学生センター

2010年度 年報

表7 Can-do statements 各項目のレベル別結果（平均）

読む	日本語	日本語	日本語	日本語
	1	2	3	4
「東京学芸大学」が読めますか。	6.9	6.9	7.0	7.0
カタカナで書かれた国名、都市名が読めますか。	6.2	6.2	6.1	5.0
スーパーの売り場標示を読んでわかりますか。	6.2	6.0	4.8	3.5
日本語で書かれた授業名がわかりますか。	6.5	6.2	4.9	2.6
大学キャンパスの案内板を読んでわかりますか。	6.3	5.9	4.5	2.8
日本語のウェブページを見て、求めるページに到達できますか。	5.9	6.0	4.9	2.8
学内の掲示板のお知らせ・ポスター等の印刷物を読んでわかりますか。	6.2	5.5	4.3	2.8
銀行や郵便局で、窓口の標示を読んでわかりますか。	6.1	5.7	4.0	2.9
図書館の本棚にある本の背表紙を見て、必要な本を探することができますか。	6.0	5.5	4.5	2.4
ガス・水道・電気の明細書をみて必要なことがわかりますか。	5.9	5.5	4.0	2.1
学校の規則を読んでわかりますか。	6.3	5.4	4.2	1.8
電車やバスなどの車内の広告がわかりますか。	5.8	5.4	4.5	3.5
駅や旅行会社においてあるちらしを読んでわかりますか。	5.9	5.3	4.0	3.0
就職情報（求人広告・アルバイト情報誌など）を読んでわかりますか。	6.0	5.5	3.5	1.6
学校・区役所（市役所）などからの通知（お知らせ）がわかりますか。	5.9	5.4	3.7	1.9
掲示板や黒板などに手書きで書かれたものが読んでわかりますか。	5.7	5.2	3.6	2.4
病院で診察を受ける前の質問票を読んでわかりますか。	5.4	4.7	3.5	1.6
新聞の社会面（事件・事故などの記事）を読んでわかりますか。	5.4	4.6	3.3	1.8
勉強に必要な本や論文を読んでわかりますか。	5.1	4.7	3.4	1.8

東京学芸大学 留学生センター

2010年度 年報

パソコンや機械の使い方の説明書（マニュアル）がわかりますか。	5.3	4.6	3.1	1.6
小説を読んでわかりますか。	5.2	4.3	2.8	1.6
新聞の社説を読んでわかりますか。	5.1	4.0	2.9	1.8
書く	日本語	日本語	日本語	日本語
	1	2	3	4
自分の名前がカタカナで書けますか。	6.9	7.0	7.0	6.9
大学の名前（東京学芸大学）を漢字で書けますか。	6.9	7.0	6.9	6.1
日本の住所を漢字で書けますか。	6.7	6.8	6.6	5.8
自分の専門を日本語で書けますか。	6.8	6.8	5.9	4.3
簡単な自己紹介文が書けますか。	6.4	6.4	6.4	5.4
先生に授業を休むことを伝える電子メールまたはメモを書くことができますか。	6.3	6.1	5.6	3.0
旅行でしたこと、見たこと、食べたものなどについて作文を書くことができますか。	6.1	5.9	5.5	3.4
日本語で日記が書けますか。	5.7	5.1	4.7	2.3
日本語で履歴書が書けますか。	5.5	4.8	3.7	1.4
封筒やはがきの住所が正しい書き方で書けますか。	5.2	5.4	5.0	3.0
図書館や学校の事務の書類が書けますか。	5.3	5.3	4.8	2.4
医者に病気の症状を説明することができますか。	5.4	4.8	4.1	2.4
会合やパーティーの案内状が書けますか。	5.0	4.7	4.7	1.9
授業・講義などで、日本語でメモがとれますか。	5.3	4.8	3.8	1.8
電話の伝言のメモを日本語で書くことができますか。	5.3	4.8	3.8	1.8
自分の考えや計画をまとめて、レポートにすることができますか。	5.2	4.5	4.2	2.9
お礼や挨拶の手紙が書けますか。	4.9	4.6	4.0	2.1
公的機関（学校や役所）に資料を請求するための文が書けますか。	4.6	4.3	3.5	1.4
自分の国の経済や社会事情などについて文章が書けますか。	4.6	4.1	3.5	2.5

東京学芸大学 留学生センター

2010年度 年報

論文などの要約を書くことができますか。	4.7	3.9	2.9	1.3
話す	日本語	日本語	日本語	日本語
	1	2	3	4
名前、出身地、専門など、簡単な自己紹介ができますか。	6.5	6.4	6.4	5.5
生年月日を日本語で言えますか。	6.7	6.8	6.8	4.1
昨日、何を食べたか日本語で言うことができますか。	6.4	6.5	6.4	4.0
スーパーでほしいものがどこにあるか聞くことができますか。	6.3	6.4	6.2	4.8
自分の国の家から日本までどのように来たか説明できますか。	6.4	6.3	6.1	4.0
日常の挨拶や、挨拶をした後の簡単な会話ができますか。	6.4	6.1	5.5	3.8
自分の国と日本の違いをひとつ、例をあげて説明できますか。	6.2	6.1	5.8	3.0
相手の言いたいことがわからない時、聞き返すことができますか。	6.1	5.7	5.4	3.4
自分の家族・仕事・勉強・国などについての質問に答えられますか。	5.8	5.7	5.3	3.0
デパートや商店で、自分の買いたいものについて、希望や条件などを詳しく説明することができますか。	5.9	5.7	5.1	1.9
電車で忘れ物をした時、自分の持ち物などを詳しく駅員に説明できますか。	5.9	5.5	4.7	1.8
授業で先生に質問ができますか。	5.9	5.3	5.0	2.9
自分の意見や考えを日本人の知り合いに十分に説明することができますか。	5.5	4.8	4.3	1.8
アルバイトの面接の時に、自分の能力などについての質問に適切に答えられますか。	5.5	5.0	3.9	1.4
専門の授業で皆の前で自分の意見が発表できますか。	5.4	4.7	4.7	2.3

東京学芸大学 留学生センター

2010年度 年報

相手の気持ちを傷つけずに、断ることができますか。	5.3	5.0	4.0	2.6
専門の授業で日本人と話し合いができますか。	5.2	4.6	4.0	1.8
電話で申し込み、注文、問い合わせなどができますか。	5.2	4.6	3.8	1.4
自分の国の社会制度（教育制度、政治制度など）を説明することができますか。	4.8	4.3	3.5	1.5
パーティーや公式の席で挨拶やスピーチをすることができますか。	4.4	4.0	3.2	1.6
聞く	日本語	日本語	日本語	日本語
	1	2	3	4
他の人の簡単な自己紹介を聞いて、理解できますか。	6.2	5.9	5.6	4.3
買い物の時、値段を言われてすぐわかりますか。	5.9	6.0	5.3	4.6
日本語のクラスで宿題について説明されて、理解できますか。	6.1	5.5	5.1	2.4
道をたずねて、その答えがわかりますか。	5.8	5.5	5.2	3.0
自分の頼んだことを、相手が引き受けてくれたか、本当は相手が断っているのかわかりますか。	5.9	5.6	4.7	3.0
親しい人同士がくれた日本語で話しているのを聞いてわかりますか。	5.4	5.5	5.1	2.9
電車・デパートなどのアナウンス（放送）がわかりますか。	5.5	5.4	4.5	3.0
郵便局・銀行の窓口での説明がわかりますか。	5.8	5.1	4.3	1.8
授業・講演などを聞いて、全体の流れがわかりますか。	5.5	5.0	4.6	2.4
病気の時、医者（医師）の指示がわかりますか。	5.6	5.1	4.4	1.9
学校職員の事務連絡を聞いてわかりますか。	5.6	5.2	4.1	1.5
テレビのドラマがわかりますか。	5.6	5.0	4.2	2.0
サービス業（デパート、ホテルなど）の人に話をして、理解できますか。	5.5	5.2	4.3	2.3
ラジオの天気予報がわかりますか。	5.8	5.0	3.9	1.5
ラジオを聞いて、どんなトピックについて話しているのかわかりますか。	5.4	5.1	3.7	1.9

東京学芸大学 留学生センター

2010 年度 年報

知らない人から電話がかかってきた時、その人の用件が、すぐにわかりますか。	5.4	4.9	4.0	2.0
ゼミや公開討論の議論がわかりますか。	4.8	4.4	2.9	1.3
政治についてのラジオのニュースがわかりますか。	4.5	4.1	2.6	1.1

2.1.5 今後の課題

2010 年度秋学期から、日本語 4 と 5 の位置づけが変更された。日本語 4 と 5 は、春学期までは国費研究留学生と教員研修留学生を対象とした日本語研修コースに位置づけられていたが、日本語能力の低い交換留学生数が年々増加し、その対策として日本語 4 と 5 を全学対象科目と位置づけることになった。そのため、特に、日本語 4 では、国費研究留学生、教員研修留学生、短期プログラム留学生、交換留学生がともに学ぶようになった。日本語能力は同等レベルであっても、短期に帰国するものと、大学院進学をめざし専門的に研究を進めるものとは、動機が大きく異なる。今後、いかにして、両者のニーズを満たして授業を運営していくかが課題となるであろう。

日本語 1 から 3 では、各科目の中での能力差が大きいことが問題となっている。限られた資源の中でレベルを増やすことは難しいが、今後、レベル設定の枠組みを再検討する必要がある。

2.2 日本理解に関する授業（「日本の文化と社会」および「日本理解科目」）

本年度より、センター内の組織再編により、日本理解教育部門が開設され、担当教員が日本理解科目に関するコーディネートを行っている。

2.2.1 授業科目

日本理解科目の一環として位置づけている「日本の文化と社会 A～H」は、4 学系が各々 2 枠を担当し、学部正規科目として開設しているものである。また、2008 年度より、専門研究基礎に関する科目を日本研究科目と改訂し、実施している。2010 年度日本理解科目は、Ⅰ．「日本の文化と社会」と、Ⅱ．「日本研究科目」として、以下のような授業を行った。

Ⅰ．日本の文化と社会

春学期

- ◆ 「日本の社会と文化 A」 （担当：戸田孝子／教育学）
- ◆ 「日本の文化と社会 C」 （担当：佐藤正光／中国古典学）

東京学芸大学 留学生センター

2010年度 年報

- ◆ 「日本の文化と社会 E」 (担当：丑野毅)
- ◆ 「日本の文化と社会 G」 (担当：石井健／書道)

秋学期

- ◆ 「日本の文化と社会 B」 (担当：佐々井啓、石川尚子)
- ◆ 「日本の文化と社会 D」 (担当：椿真智子／地理学)
- ◆ 「日本の文化と社会 F」 (担当：二宮修治／文化財科学)
- ◆ 「日本の文化と社会 H」 (担当：山本まり子／書道)

II. 日本研究科目

春学期

- ◆ 「日本研究 A (社会)」 (担当：高崎恵)
- ◆ 「日本研究演習 B (人文)」 (担当：有澤知乃)
- ◆ 「日本研究 C (教育)」 (担当：遠座知恵)
- ◆ 「日本研究演習 D (芸術)」 (担当：石井健)

秋学期

- ◆ 「日本研究演習 A (社会)」 (担当：加藤拓)
- ◆ 「日本研究 B (人文)」 (担当：有澤知乃)
- ◆ 「日本研究演習 C (比較研究：文化と教育)」 (担当：戸田孝子)
- ◆ 「日本研究 D (芸術)」 (担当：石井健)

2.2.2 留学生による授業評価

各授業において、学期終了前に学生による授業評価の実施を各担当教員に依頼している。教員が質問用紙と回答用紙（マークシート）を配布し、学生が回答した用紙は学生自身が回収し、国際課に提出するという方法をとっている。授業に関する質問項目は下記のとおりである。日本語のほか、英語、中国語、韓国語の4言語で記載している。なお、無記名方式である。（質問項目は日本語科目と同じである。）

2010年度春学期は、3教員の3科目において実施された。のべ回答者数は、15人であった。各項目についての全科目の平均値と標準偏差は次の表8のとおりである。

東京学芸大学 留学生センター 2010年度 年報

表 8 2010年度春学期授業評価の結果（全科目）

	問 6	問 7	問 8	問 9	問 10	問 11	問 12	問 13	問 14	問 15	問 16
平均値	4.93	4.73	4.80	4.87	4.93	4.87	4.80	4.93	4.80	4.87	3.21
標準偏差	0.26	0.46	0.41	0.35	0.26	0.35	0.41	0.26	0.41	0.35	0.80

秋学期は、2 教員の 2 科目において実施された。のべ回答者数は、16 人であった。各項目についての全科目の平均値と標準偏差は表 9 のとおりである。

表 9 2010年度秋学期授業評価の結果（全科目）

	問 6	問 7	問 8	問 9	問 10	問 11	問 12	問 13	問 14	問 15	問 16
平均値	4.87	4.75	4.56	4.81	4.94	4.88	5.00	5.00	4.94	4.81	3.00
標準偏差	0.34	0.43	0.61	0.39	0.24	0.33	0.00	0.00	0.24	0.53	0.61

2.2.3 今後の課題

留学生担当専門教育教員のポストが削減され、本年度でなくなることになった。このような状況の中で、留学生の日本理解科目の充実に向け、「日本の文化と社会」開設教室を含めて議論する場を設けていく必要があることは今後の課題である。

2.3 見学・交流事業

2009年度に引き続き、12月に落語公演「カナダ人落語家 桂三輝（サンシャイン）の落語の世界」を実施した。公演者の桂三輝氏は、本学日本語研修コース修了留学生である。公演では、古典落語と現代落語1本ずつをうかがい、その後質疑応答を行った。参加者約50名。落語がはじめてという留学生が大半であったが、講演者が留学生に配慮した話し方、内容を選択したため、十分理解し、楽しめたようである。

日本理解に関する講演会を、外部から講師を招き開催した。（6月『在日』の視点から見る世界」講師：蔡光浩氏、12月「大谷光瑞：アジアと日本の発見」講師：ブリッジ・タンカ氏）参加者は各25名だった。両講演会ともに英語を使用言語としたので、日本語能力が不十分なために受講科目が限られてしまう学生にとって、専門的な内容を学びクラスメートと議論することができる貴重な機会になったと思われる。

6月に講演会「日本の伝統文化とマナー」（講師：永井とも子氏）を行った。参加者は約20名だった。

東京学芸大学 留学生センター

2010年度 年報

春学期、秋学期、毎週金曜日5限にN313で「国際交流カフェ」を開催した。カフェとして、コーヒー、紅茶、お茶などの飲み物を提供し、参加者にはネームプレートをつけてもらった。内容は、6人ほどのグループに分かれ、異文化交流のさまざまなテーマで議論したり、世界のゲームや、国の紹介（フランス、ドイツ、中国、韓国、マレーシア、スウェーデン、日本の地方など）などを行った。行事として、カラオケ大会、クリスマスケーキ作り、かるた大会、将棋大会なども行った。

参加者（1回でも参加した人の数）は、春学期日本人学生40名、留学生28名、秋学期日本人学生39名、留学生23名であった。1回の参加者数は50人ほどになることもあったが、少ないときは、15名程度であった。

最初は担当教員の岡が司会を務めたが、途中からは、学生が司会を担当し、進める方式に代わった。学生の色々なアイデアで、楽しく、留学生と日本人学生の交流ができたのではないと思われる。留学生はアジア系が中心だったので、欧米や他の地域の留学生の参加が望まれる。

秋学期に、毎週昼休み「外国語でしゃべランチ（中国語（月）・韓国語（火））」を開催した。ネイティブの留学生とその言語を学んでいる日本人学生との交流の場として、行った。月曜日の中国語でしゃべランチは、日本人学生6名、留学生7名が参加した。火曜日の韓国語でしゃべランチでは、日本人学生14名、留学生12名が参加した。日本人との交流活動として、8月に、清里高原で国際交流合宿を行った。

日程：2010年8月7（土）～8日（日）1泊2日

場所：山梨県清里高原（ヴィラ千ヶ滝）

参加者：学生40人（日本人学生12人、留学生28人）、引率教員2人

内容：行きのバス内での自己紹介、他己紹介の活動。滝沢牧場での乗馬体験など体験活動。各班ごとの活動。花火。交流会。各班ごとの発表会など。

2010年2月に続く、2回目の合宿だった。今回は、留学生5人、日本人学生6人のスタッフが集まり、事前に各班ごとの発表テーマを決め、合宿に臨んだのはよかった。夏休み中だったので、行き帰りとも渋滞に遭ったのは、問題点だった。詳細は、報告集を作成し、参加者や学内関係者にも配った。

2.4 研究支援・生活支援事業

本年度は国際課が運営するチューター事業と運営する論文添削事業を支援した。また、5月と11月にチューター説明会（チューターの役割等。チューター希望者への呼びかけ、募集を含む）を実施した。

そのほか、春学期、秋学期に毎週「日本語支援室」を開催し、日本語の支援を行った。

東京学芸大学 留学生センター

2010年度 年報

春学期は、日本人学生支援者6名、留学生14名、秋学期は、日本人学生支援者4名、留学生12名が参加した。春学期は、最初日本人の支援者が20数名も集まり、留学生が数名という状況で始まったので、多くの日本人学生には帰ってもらってちょっともったいなかった。春学期は、毎回来る学生が3名程度でほぼ定着した。秋学期は、支援者が3名程度で、毎回来る学生が1～2名程度になってしまい、学生が来ない日もあったので、少し寂しい感じになった。今後は、日本語支援だけでなく、留学生支援室として別な形で運営していき、留学生の参加を促進する必要があると思った。

留学生からの相談は、留学生センター教員全員が対応した。留学生センター教員が受けた新規の相談件数は、全体で134件、のべ件数は169件であった。月別に相談件数をまとめたものが表10（新規分）、表11（のべ件数）である。

表10 月別新規相談件数

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計
就学上の悩み	14	7	4	7	0	10	29	4	2	3	1	21	102
進路について	3	0	5	1	0	0	1	0	1	0	0	0	11
経済的な悩み	3	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	4
対人関係	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
精神面	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	3
健康面	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
その他	1	2	1	0	0	0	1	1	0	0	0	7	13

表11 月別のべ相談件数

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計
就学上の悩み	14	7	4	10	0	10	33	4	2	3	1	41	129
進路について	4	0	6	1	0	0	1	0	1	1	0	0	14
経済的な悩み	3	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	4
対人関係	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
精神面	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	3
健康面	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
その他	1	2	1	0	0	0	3	1	0	0	0	10	18

表のとおり、相談件数は、相談内容により「就学上の悩み」「進路について」「経済的

東京学芸大学 留学生センター

2010 年度 年報

な悩み」「対人関係」「精神面」「健康面」「その他」に分類した。「その他」の相談には、地震関連、銀行カード等の紛失、チケットの購入方法などがあつた。

3. 国費研究留学生および教員研修留学生（教研生）対象の事業

3.1 日本語集中コースおよび一般日本語科目の開講

留学生センターでは、国費研究留学生および同じく国費の教員研修留学生（次節で詳述）に対する日本語集中研修を行っている。2009 年春学期までは、入門・初級段階の日本語集中研修を行なう場として「日本語研修コース」を開講していたが、2009 年度秋学期より全学留学生対象日本語科目のレベル設定の変更にともない、入門・初級段階はレベル 5・4、中級以上の段階はレベル 3～1 のクラスで対応することとした。

2010 年度に受入れた国費研究留学生および教員研修留学生と配置された日本語クラスは、表 12 の通りである。なお、配置にあたっては、面接およびプレースメントテスト、言語行動能力に対する自己評価（Can-do Statements）を行った。

表 12 日本語レベル別国費研究留学生（国研生）および教員研修留学生（教研生）の受入数

日本語 レベル	2010 春受入	2010 秋受入れ		備考
	国研生	国研生	教研生	
1			2	
2			3	
3			1	
4		1	0	初級後半・集中
5		0	9	入門・集中
計			15	

3.2 教員研修プログラム

3.2.1 プログラムの目的、研修内容、修了の要件

文部科学省の奨学金留学生である「教員研修留学生」（大学院レベル）は、日本の大学において学校教育に関する研究を行うことを目的とし、「大学又は教員養成学校を卒業した者で、自国の初等、中等教育機関の現職教員及び教員養成学校の教員であり」「通算 5 年以上の現職経験がある」^vことが資格要件となっている。なお、現職の大学教員

^v 文部科学省 HP> 「2010 年度日本政府（文部科学省）奨学金留学生 教員研修留学生募集要項」より
(http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1288256.htm)

東京学芸大学 留学生センター

2010年度 年報

は対象とされていない。渡日後6ヶ月間の日本語予備教育を受講し、その後、大学が提供する1年間の研修プログラムに従って教育指導を受ける。留学期間は、予備教育を含め1年6ヶ月間である。

東京学芸大学では、「教員研修留学生」制度が創設された1980年以来例年10数名を受入れている。本学には14の附属学校・養護学校があり、また、教員養成カリキュラム開発センター、教育実践研究支援センター、現職教員研修支援センター、国際教育センターなど、教員養成に特化した施設・センターが充実しており、さまざまな領域で研修を受けられることが一つの特色である。研修留学生の専門の研究はそれぞれ所属の研究室にておこなうが、日本語の運用能力を身につけずに来日した場合は、初めの1学期間、留学生センターの日本語コースにて1週間14コマ×15週間の集中コースを受講する。

研修の主な内容は以下の通りである。

(1) 専門教育 Specialized Education

指導教員の指導のもとで、研修生の希望、個人研究のテーマ、日本語能力などを考慮して履修科目を決定する。

(2) 個人研究 Individual Research

本人の希望する研究テーマについて、指導教員の指導の下で研究し、研修終了時までその成果をレポートにまとめ、指導教員を経て留学生係に提出する。これは報告書として刊行される。

(3) 見学実習 Visits

附属学校・教育行政機関・施設などの参観、地域の文化活動への参加、日本人学生との交流、見学実習などを必要に応じて実施する。

(4) 日本理解科目 Japanese Studies Subjects

留学生対象の教育関連科目から1科目以上、「日本の文化と社会に関する科目」、「日本研究科目」、「短期留学プログラム (ISEP) 講義科目・フィールド科目」のすべての科目の中から1科目以上、計2科目以上を履修する。

(5) 日本語科目 Japanese Language Subjects

上記の研修を終え、その成果を指導教員が認めた者については、本学学長名において修了証書を授与している。

東京学芸大学 留学生センター

2010 年度 年報

3.2.2 2010 年度研修概要

2010 年度は、2009 年秋に来日した研修生（以下「2009 教研究生」）と 2010 年秋に来日した研修生（以下「2010 教研究生」）に対する研修を行った。以下、それぞれの研修概要を述べる。

[2009 教研究生]

2009 教研究生は、半年間の日本語予備教育を終え、2010 年 4 月からは基本的に各自の専門領域の研究室に所属し、指導教員の指導の下で研究を行った。専門の研究と並行して、ほとんどの研修生は日本理解科目や 2009 年秋学期に続いて日本語科目も受講した。

専門研究の成果は各自レポートにまとめて提出し、後日『報告集』として刊行するが、2010 年度は修了式に先だって、研究報告発表会を開催した。研究報告発表会についてこれまでの経緯を簡単に述べると、以前は修了式の前にまる 1 日をかけて研究発表会を開催していたが、最初から最後まで参加する聴衆が少なく、留学生センターの行事として全体で行う意義を見いだせなくなったため、4 年前に全体での発表会の開催を取りやめ、各研究室にゆだねていた。2010 年度は、2009 教研究生の修了に際して、全体での発表会を復活させた。ただし、2009 教研究生に対してはプログラム開始当初に発表会の開催を予告していなかったことから、発表会への参加は全員に求めたが、発表をするかしないかは任意とした。その結果、以下 9 名が発表することになった。専門分野が多岐にわたり、また、一人 10 分という制限時間内での発表であったにもかかわらず、専門の異なる聴衆に対する配慮も見られ、それぞれわかりやすいプレゼンテーションが展開された。表 13 は、研究発表会で示された各研修生の発表題目である。

表 13 2009 教研究生発表題目（発表会）

氏名	国籍	発表題目	指導教員
エバエギン マーロン カシミロ (Ebaequin Marlon Casimiro)	フィリピン	Adapting Mondaikaiketsu in Philippine Classrooms and It's Potential in Improving Mathematics Education in the Philippines	藤井 斉亮 (数学科教育)
ロドリゲス カンディ イザベル (Candy Isabel Rodriguez Sanchez)	メキシコ	Using Information and Communication Technologies for Education in Japan	宮寺 庸造 (情報教育)
ジョン ジュミ (全 珠美)	韓国	小中高等学校習活動を支援するeラーニングシ ステムの構成と学習モデルの提案	宮寺 庸造 (情報教育)

東京学芸大学 留学生センター

2010 年度 年報

イ ユンギョン (李 倫京)	韓国	効果的な食生活教育についての考察 -日本の食育を手がかりとして-	池崎喜美恵 (家庭科教育)
シン ジンヨン (申 眞暎)	韓国	日・韓経済教科書とカリキュラムの比較を通 した授業提案	高藪 学 (経済学)
チェ スウヒョン (崔 守亨)	韓国	論理的思考力を育てる説明的文章の読みの指 導-言語論理教育の視点からのアプローチ-	中村 和弘 (国語科教育)
ジョ ハンギ (趙 漢奇)	韓国	持続可能な発展のための実践と教育の理解	篠原文陽児 (学校教育)
パジェコ レアンドロ モレイラ (Pacheco Leandro Moreira)	ブラジル	Learning Strategies Inspired by Japanese Culture: Integrating Eastern Philosophies into the Brazilian Public Elementary School Curriculum	浅沼 茂 (学校教育)
メイ サバイ ピューヌ (May Sabai Phyu Nu)	ミャンマー	School Administration on Teaching-Learning Practices At the Elementary Schools in Japan	佐々木幸寿 (学校教育)

見学実習の活動としては、「歌舞伎鑑賞教室」に参加し、日本の伝統芸能を鑑賞した。

[2010 教研究生]

2010 教研究生は下記の 10 カ国 15 名である。日本語学習歴に関する面接の結果、15 名中 9 名がレベル 5 の日本語クラスにおいて日本語を集中的に学習することになった。残る 6 名は、配置されたレベルの日本語科目を必要に応じて受講しながら、専門領域の指導教員によるゼミ等にも参加した。

2010 年度秋学期の試みとして、「共通基礎セミナー」を週に 1 回 (月 5 限) 開講した。これまで、来日後すぐの 6 ヶ月間はそれぞれの日本語レベルに応じた日本語学習が主であったため、全員が顔をそろえる機会は課外活動以外になかった。そこで、教育学を専門とし、留学生センター長でもある渋谷英章教員の発案・指導で、教員研修留学生が一堂に会して自国の教育現場を紹介する等、教育について議論や情報交換をする場を設けることとなった。この「共通基礎セミナー」は基本的に英語を媒介語として行なわれ、一部の 2009 教研究生も参加した。

見学実習の活動としては、附属竹早小学校との交流授業に参加し、また、同小学校の外国語担当教員との懇談を行なった。附属竹早小学校以外に、任意で附属小金井小学校、附属大泉小学校との交流授業にも参加し、学校生活や教育活動の見学をおこなった。1

東京学芸大学 留学生センター

2010 年度 年報

月末には、2010 教研生の強い希望もあって全学留学生対象に大相撲見学を企画したが、一部力士の不祥事から興行そのものが中止になり、実現しなかった。

2010 年度秋学期の終盤、3 月 11 日に日本は東北大震災に見舞われた。地震に続く津波、原発事故は 2010 教研生の留学生活にも多大な影響を及ぼし、残念ながら、一人の研修生が研修の継続を断念し、奨学金を辞退することとなった。

表 14 2010 年度教員研修プログラムの主な行事

年 月	09 教研生:	10 教研生
2010 04	第 2 回オリエンテーション 日本語プレースメントテスト 秋学期授業開始	
05		
06	歌舞伎鑑賞教室 (於: 国立劇場)	
07	秋学期授業終了	
08		
09		
10	日本語プレースメントテスト 春学期授業開始	来日 面接および第 1 回オリエンテーション 春学期授業開始
11		附属竹早小学校交流授業および懇談 日光・見学旅行 (全学留学生対象)
12	附属大泉小学校交流授業 (自由参加)	附属大泉小学校交流授業 (自由参加)
2011 01		大相撲見学【興行中止】
02	21 研究発表会・修了式	春学期授業終了
03	帰国	[東日本大震災]

3.2.3 今後の課題

本学では毎年 15 名前後の教員研修留学生を安定的に受入れており、この点で、本プログラムは一定の評価が得られているものと思われる。しかし、本プログラムの内容をより充実させていくためには、教員研修留学プログラムの運営母体についての検討が引き続き必要であると考えている。

教員研修留学プログラムは、最初に述べた通り、1 年 6 ヶ月間のプログラムである。

東京学芸大学 留学生センター

2010年度 年報

が、後半の1年間はそれぞれの指導教員の下で専門研究を行なうことになるため、留学生センターが教員研修留学生と直接大きな関わりを持つのは、日本語学習が主となる来日直後の6ヶ月間であった。教員研修プログラムの趣旨から考えると、留学生センターが本プログラムの運営母体となるより、より全学的な運営体制を構築することが望ましい。そのような認識から2010年度は、教員研修留学生をこれまで比較的多く受入れている教員2名とセンター長、センター教員1名とでワーキンググループ（「教員研修プログラム検討WG」）を構成し、検討を行なった。その結果、プログラム内容を再検討し、在外公館等に配布されるプログラムガイドを改訂したほか、「共通基礎セミナー」の開講や研究報告発表会の開催など、同期の教員研修生が相互に刺激し合える場を提供することで、プログラム全体の充実をはかった。全学的な運営母体の組織化については、「教員研修プログラム検討WG」を中心に今後も継続的な検討を行なっていくことを確認した。

4. 日本語・日本文化研修留学プログラム留学生（日研生）対象の事業

4.1 プログラムについて

4.1.1 目的

本プログラムは、母国で日本語もしくは日本文化を専攻する学部生が、日本語能力の向上と日本の文化社会に関する理解を深めることを目的とする。

4.1.2 研修内容

以下の6分野に分かれている。

- | | | |
|----------|------------|-------------|
| (1) 日本語 | (2) 日本理解科目 | (3) 日研生特別演習 |
| (4) 専門研究 | (5) 個人研究 | (6) 文化交流 |

(1) 日本語

留学生対象の日本語科目は「選択科目」である。日本語力が十分にある人は、専門研究を通して日本語力を高めることもできる。

(2) 日本理解科目

留学生対象の日本理解科目として、以下の科目がある。

- ・「日本の文化と社会」8科目（秋学期4科目、春学期4科目）
- ・「日本研究」8科目（秋学期4科目、春学期4科目）

これらの科目は「選択必修科目」です。この中から最低2科目を選んで受講する。

東京学芸大学 留学生センター

2010年度 年報

(3) 日研究生特別演習

日研究生のための「日研究生特別演習Ⅰ」（秋学期）・「日研究生特別演習Ⅱ」（春学期）がある。これらは「必修科目」である。

(4) 専門研究

自分の研究テーマや興味・関心、日本語力を考えて、指導教員とよく相談し、必要な科目を選択する。留学生対象科目以外に学部の開設科目も受講できる。

(5) 個人研究

研修修了までに、レポートにまとめて提出する。テーマについては、指導教員とよく相談する。「日研究生特別演習Ⅱ」の時間帯で、研修生が各自のレポートの内容について発表する。

(6) 文化交流

学生交流、地域交流、見学旅行、芸能鑑賞など、国際文化交流のイベントを行う。

4.1.3 修了要件

1年間の研修を終え、その成果を指導教員が認めたものについては、本学学長名において修了証書を授与する。

修了のためには、つぎの i) と ii) が必要である。

i) 上記(1)～(4)まで合わせて12科目以上履修すること

a. 上記(2)を2科目以上履修すること

b. 上記(3)の2科目を履修すること

ii) 上記(5)のレポートを期限までに提出すること

*毎学期は、かならず6科目以上履修しなければならない。

4.2 2010年度研修概要

4.2.1 2010年度前期（2009年10月来日の日研究生）

2010年度の研修期間（春学期）は2010年4月1日（木）～2010年9月30日（木）となっている。日研究生の名簿は次のとおりである。

東京学芸大学 留学生センター 2010年度 年報

表 15 2009年10月入学日研究生名簿

氏名	国籍	性別	在籍大学	指導教員
マイヤーズ・アリシャ	アメリカ	女	イースタンミシガン大学	任都栗 新
リ・サイ	中国	男	北京師範大学	谷部 弘子
ハク・リン	中国	女	華東師範大学	許 夏玲
チン・カンキ	中国	女	上海師範大学	斎藤 純男
パスカル・メスマー	ドイツ	男	ハイデルベルク大学	斎藤 純男
ウシュマン・エリザベート	ドイツ	女	エアランゲン／ニュルンベルク大学	斎藤 純男
マッドソン・アペルモ・オスカル	スウェーデン	男	イエーテボリ大学	斎藤 純男
ニコラ・シモン	フランス	男	フランス国立東洋言語文化大学	岡 智之
サガルダ・マリーナ	ウクライナ	女	キエフ国立言語大学	許 夏玲
アトハムジャノフ・コシムジョン	ウズベキスタン	男	タシケント国立東洋学大学	岡 智之
ティンチュリナ・ダミラ	ウズベキスタン	女	タシケント国立東洋学大学	谷部 弘子
スモライニナ・エカテリナ	エストニア	女	タリン大学	岡 智之
キラティ・ツットガムスジャーリット	タイ	女	チュラーロンコーン大学	島田 めぐみ
ガムゼ・チャルシュマク	トルコ	女	エルジエス大学	許 夏玲
サースタモイネン・サリタ	フィンランド	女	ヘルシンキ大学	岡 智之
グエン・ティー・フォン・マイ	ベトナム	女	ハノイ国家大学外国語大学	谷部 弘子
ヴァミリエヴァ・アリーナ	ベラルーシ	女	ベラルーシ国立大学	島田 めぐみ
ナブエツト・アンナ	ポーランド	女	ヤギェウォ大学	任都栗 新
カルボビッチ・カタジナ	ポーランド	女	ワルシャワ大学	島田 めぐみ
セラフィン・カロリーナ	ポーランド	女	アダム／ミツキエヴィチ大学	許 夏玲

春学期の行事日程は下記のとおりである。

- 4月08日（木） 日本語プレースメントテスト
- 4月12日（月） 春学期（前期）授業開始
- 5月12日（水） 研究レポート中間発表会
- 5月19日（水） 東京都消防庁立川都民防災教育センター見学
- 6月09日（水） 国会議事堂見学
- 6月30日（水） 講演会「日本の伝統文化とマナー」
- 7月21日（水） 藍染め見学
- 7月30日（金） 春学期（前期）授業終了
- 8月04日（水） 研究レポート提出締切

東京学芸大学 留学生センター

2010年度 年報

9月06日(月) 研究レポート発表会、日本語日本文化研修プログラム修了式

【必修科目である「日研究生特別演習II」(前期) (毎週水曜日)において上記の見学・交流活動及びレポートのための研究討論を行った。】

2011年1月に「2009.10-2010.9 日本語日本文化研修留学生研修レポート集」が発行された。以下のとおり、研究レポートの題目から日研究生の様々な分野への関心がうかがえる。

日本社会の少子化

アトハムジョノフ・コシムジョン (ウズベキスタン)

日本人は集団主義的なのか？

ウシュマン・エリザベート (ドイツ)

日本のフリー・ジャズ

カルポビッチ・カタジナ (ポーランド)

日本における過労死

グエン・ティ・フォン・マイ (ベトナム)

ニートとフリーター、社会人になれない若者たち

サースタモイネン・スサンナ (フィンランド)

動画共有サイトのコメント調査を通して- 日本のコマーシャルについて -

サガルダ・マリーナ (ウクライナ)

ポストモダン時代の消費者とアイデンティティ

ジットガムスジャーリット・キラティ (タイ)

オタクのステレオタイプ

スモライニナ・エカテリナ (エストニア)

現代日本の若い男性像

セラフィン・カロリーナ (ポーランド)

檀家制度の成立と現状 - 東京都東久留米市多聞寺を例として -

チン・カンキ (中国)

流行言葉

チャルシュマク・ガムゼ (トルコ)

不登校から再登校への道

ティンチュリナ・ダミラ (ウズベキスタン)

ヴィジュアル系：ファン・ファンの用意表現

東京学芸大学 留学生センター

2010年度 年報

ナブラット・アンナ (ポーランド)

東京のホームレス - 経験する不公平と承認の闘争 -

ニコラ・シモン (フランス)

バラエティー番組

アリシャ・ノエル・マイヤーズ (アメリカ)

外国の脅威 - 来日外国人の指紋提供の義務化について -

マットソン・アペルモ・オスカル (スウェーデン)

日本語の多様性と日本語の学習

メスマー・パスカル・マヌエル (ドイツ)

日本の大学のゼミナールについて - 東京学芸大学を例に -

バイ・リン (中国)

言語干渉の調査 - ロシア人と中国人の留学生間の会話を対象として -

ヴァシリエヴァ・アリーナ (ベラルーシ)

中日教育理念の比較 - ゆとり教育と素質教育 -

リ・サイ (中国)

4.2.2 2010年度後期 (2010年10月来日の日研生)

2010年度の来日日研生の研修期間 (秋学期) は、2010年10月1日 (金) ~ 2011年3月31日 (木) であった。

秋学期の行事日程は下記のとおりである。

10月08日 (金)	合同開講式、10月来日留学生のためのオリエンテーション
10月12日 (火)	日研生オリエンテーション
10月13日 (水)	日本語プレースメントテスト
10月18日 (月)	秋学期授業開始
11月10日 (水)	附属小金井小学校との合同授業 *
11月24日 (水)	東京都消防庁立川都民防災教育センター見学 *
12月01日 (水)	附属小金井小学校との合同授業 *
12月08日 (水)	文楽鑑賞教室 *
12月13日 (月)	カナダ人桂三輝による落語公演
01月12日 (水)	ジブリ美術館見学 *
02月02日 (水)	附属小金井小学校との合同授業 *
02月11日 (金)	授業終了

東京学芸大学 留学生センター

2010 年度 年報

* は、日研生特別演習で実施した行事である。

表 16 2010 年度 10 月入学日研生名簿

氏名	国籍	性別	指導教員
リュセル イェスパー	スウェーデン	男	谷部 弘子
レン キョク	中国	女	斎藤 純男
スリヨー カジョンポン	タイ	男	島田 めぐみ
リョウ チンホウ	香港	男	島田 めぐみ
クラソツコ マチルダ	ポーランド	女	有澤 知乃
グエン チャン ティ	ベトナム	女	岡 智之
ルンド シモン	スウェーデン	男	谷部 弘子
リ ディエブ ホン	ベトナム	女	許 夏玲
ディアナ ステファンコヴァ	スロバキア	女	斎藤 純男
ショール ラウラ	スイス	女	有澤 知乃

4.3 今後の課題

日本語日本文化研修という目的で来日するこのプログラムの留学生達に対し、日本語日本文化関係の科目のみ提供するのではなく、日本でしか体験できない見学や交流活動を提供する必要があると考えられる。また、日本との交流を通じて、各国から来日した留学生達の異文化間の交流の機会も設ける必要がある。これは、日本語特別演習で日研生達が各自の研究テーマについて発表・討論したことにより異文化交流ができたと思われる。今後、日本語日本文化研修プログラムの意義を再検討し、異文化交流においてインプットとアウトプットのバランスの良いプログラム内容を見直したい。

また、受け入れ日研生が 2009 年度の 20 人から 2010 年度は 10 人に半減した。そのため、附属小金小学校との交流授業では、2010 年度は教員研修留学生を加えるという策をとった。しかし、今後、交流授業を継続させるためには、これ以上の減少を抑えることが緊急課題となる。受け入れ日研生数を増加させるためには、魅力あるプログラムを作りあげていくほか、特に大使館推薦で来日する学生を対象にホームページなどを活用しプログラムの魅力を伝えていくことが必要となる。

東京学芸大学 留学生センター

2010年度 年報

5. 短期留学プログラム（ISEP）留学生対象の事業

5.1 プログラムの目的、研修内容、修了の要件

英語による授業を提供することにより、これまで日本語能力が不十分であるために日本に留学することができなかつた外国人学生の受け入れを可能とし、専門分野の学習を続けながら、日本の文化や社会への理解を深め、国際交流を促進することを目的としている。このため、英語を母国語としているか、英語能力が TOEFL (PBT) 500 点相当以上であることを、受け入れ最低条件の一つとしている。また、授業を短期留学プログラム生以外の留学生や日本人学生にも受講を認めており、学生交流を通して日本の文化や社会を理解する機会を増やすことも目的としている。

半年または一年間の、学生交流協定校からの交換留学生受け入れプログラムで、上述の英語による授業（講義科目、実技・実習科目）、日本語による日本理解科目、日本語科目、及び個人研究プロジェクトから構成されている。各学期 7 科目（内、ISEP 科目 5 科目以上）及び、個人研究プロジェクトの発表及びレポート作成を終了要件としています。ISEP で履修した科目の評価は、帰国後に本籍大学で単位認定の申請をできることになっており、本学では学部準じた評価を出すことにしている。

5.2 2010年度プログラム概要

● 受け入れ学生及び国籍

2009 年度秋学期～2010 年度春学期：16 名

中国（香港を含む）、台湾、韓国、タイ、ドイツ、アメリカ

2010 年度秋学期～2011 年度春学期：23 名（内 9 名は秋学期のみ。[東日本大震災の影響による早期帰国。]）

中国（香港を含む）、台湾、韓国、タイ、ドイツ、スウェーデン、ポーランド（本籍大学はイギリス）、オーストラリア、アメリカ

● 英語による ISEP 科目開講数

春学期：17 科目（講義科目 10、実技・実習科目 7）

秋学期：14 科目（講義科目 9、実技・実習科目 5）

5.3 今後の課題

学生の専門分野が多岐にわたっており、また日本語能力や日本理解の程度にも差があるため、個々の要望に応じた対応を求められている。プログラムとしての目的や目標を明確にしつつ、個々の専門性を深められるような構成に改革していくことが必要である。また、修学成果の評価や単位認定についても今後の課題である。

東京学芸大学 留学生センター

2010年度 年報

6. その他の活動

6.1 修了留学生ネットワーク構築事業

2010年度は、台湾大学および香港中文大学の担当教員との懇談の機会を設け、情報交換を行ったが、修了留学生ネットワーク構築については検討段階にとどまり、「辟雍会」との連携も含めて、有効な方策を打ち出せなかった。次年度への課題とする。

6.2 トップマネジメント経費による教育活動

トップマネジメント経費を受け、以下の活動、報告書の発行を行った。

- 1) 日本語による言語行動に対する自己評価アンケート調査の分析および各レベルの Can-do statements 一覧表の作成。
- 2) ISEP 学生と日本人学生による共同調査プロジェクト（「『外国人学校』と日本のマイノリティ問題」）の実施と報告書の作成。
- 3) 附属小学校3校と留学生との交流活動の実施と報告書（『2010事業報告 附属小学校と留学生との交流授業』）の作成。

6.3 広報活動

センターホームページの充実をはかるとともに、部門の再編にともない留学生センターの広報用パンフレットを新たに作成した（日英語併記）。